

## 五井蘭洲『萬葉集詁』の諸本について

―その体裁の検討と、一部〈翻刻〉―

北谷 幸 冊

はじめに

さきに私は、『萬葉集詁』（五井蘭洲著）を、もと故吉永登<sup>みのもり</sup>博士所蔵の三冊本（以下「吉永本」と略称することとする）により翻刻、発表し（『相愛国文』第六号・第七号・第八号）、次いで「索引」を付した（『相愛国文』第九号）。翻刻、索引作成の作業と前後して、幸い無窮会神習文庫所蔵の三冊本（以下「神習文庫本」と略称する）・東京国立博物館資料館所蔵の五冊本（以下「東博資料館本」と略称する）・岡山大学図書館小野文庫所蔵の五冊本（以下「岡山大学本」と略称する）を、閲覧する機会を得た。

翻刻の際に底本とした吉永本『萬葉集詁』三冊は、現在園田学園女子大学図書館吉永文庫に所蔵されているが、次章にあげる類の、『萬葉集詁』について解題するものによれば、神習文庫本・東博資料館本・岡山大学本のほかに、いづれかに所蔵されている別本があらうかとも思われる。

本稿では、原本を見ることができた吉永本・神習文庫本・東博資料館本・岡山大学本の四本について、その体裁を検討する。併せて、吉永本にはないが、神習文庫本には付されている（あとがき）と、東博資料館本の「萬葉集詁<sup>マンヤク</sup>」の成立事情の一端を知る手だてともなうと思えるからである。

五井蘭洲『萬葉集詁』の諸本について

一 『萬葉集詁』についての解題書

『萬葉集詁』についての解題を付すものに、近くは『補訂版國書總目録』（岩波書店）・『古典籍総合目録』（岩波書店）があるが、その他にこの書を解題するものの数は、さほど多くはない。今回管見し得た主なものを掲げれば、次のとおりである。

ア 万葉集詁<sup>(マナ)</sup> 六卷三冊 ①注釈 ②五井純禎、子常補 ③宝暦二成、寛成九序 ④東博・無窮<sup>神習</sup>

（国文学研究資料館編『補訂版國書總目録』第七卷、平成二・九・六。五〇二頁）

イ 万葉集詁<sup>(マナ)</sup> 六卷三冊 ①注釈 ②五井蘭洲（五井純禎）、子常補 ③宝暦二成 寛政九序 ④岡山大小野

（五冊）

（国文学研究資料館編『古典籍総合目録』△國書總目録続編Ⅱ第二卷、平成二・三・二六。三七九頁）

ウ まんえふしふこ 萬葉集詁<sup>写本</sup> 四卷 五井純禎

言語をいろは順に集め、卷一を天文、時候。卷二を鬼神、人倫、支體。卷三を態藝、事爲。卷四を虚詞、助辭等に言語の一々を解釋したるものなり。

（佐村八郎『國書解題』、大正二五・一〇・一〇増訂改版。一八五二頁）

エ 萬葉集詁 五冊 寫 五井蘭洲

集中の句を天文時候等に分類し、略解を施したもの。寛政九年中川昌房の序がある。

（佐佐木信綱『萬葉集研究書目解題』△『萬葉集選釋』、昭和四・四・二〇第一版、五二〇頁▽）

オ 万葉詁<sup>(マナ)</sup> 三冊 半紙袋綴写本（吉永 登氏蔵）

萬葉集の語句を卷一天文時候・卷二鬼神人倫支體・卷三態芸事爲・卷四虚詞助辭にわかし、各卷いろは順に配

列して略解したもの。

写本には他に四冊本五冊本がある。それらには巻首に寛政九年十月高津中川昌房の序（純禎の歌並びに此書のことを述べてゐる）と巻末に萬葉集凡例のあるものもある。

（八木 毅「懷徳堂の和学書目並解説」△大阪大学國文学研究室『語文』第一〇輯「懷徳堂の和学特輯号」▽、昭和二九所収）

カ 萬葉集詁 三冊 寫 五井蘭洲

體裁 薄赤紙畫表紙。内容 集中の語彙を、天文時候、地理宮室、鬼神人倫支體、草木穀菜、鳥獸蟲魚、服食器財、態藝事爲、虛詞助辭の八部門に類別し、その中を更に以呂波順に掲げ、略注を附せるもの。備考 大島雅太郎氏所蔵。

（佐佐木信綱『萬葉集事典』典籍編、昭和四四・四・一〇、四版、七〇二頁）

キ まんえふしふこ 萬葉集詁 四卷 五井純禎撰 寫本

この書は、卷一天文時候、卷二鬼神人倫支體、卷三態藝事爲、卷四虛詞助辭にわかし、各卷いろは順に語を集めて解釋せり。

一本、巻末に萬葉集凡例、巻首に寛政九年一〇月高津昌房という人の、純禎の歌并に此書のことを述べたる文を添へたるあり。

（『国語学書目解題』補遺、昭和五一・九・九、複製、三〇頁）

これらの解説するところをみれば、冊数・巻数がさまざまであることをはじめとして、内容も同一ではない。

右のうちの、オに云う『万葉詁』は『萬葉集詁』の誤り（八木毅氏からの教示による）である。また、イに説く「岡山大学本」は、著者名、補訂者名も、成立を示す「序」も付されていない五冊本である。ウ・エ・カ・キの解題する

ところのいずれかが、無窮会神習文庫・東京国立博物館資料館・岡山大学小野文庫に所蔵されるものかと思われるが、オの解題も含めて、ウ・オ・カ・キが解説する各巻の内容はいずれも、吉永本・神習文庫本・東博資料館本・岡山大学本それぞれの各巻の内容と全く一致するとはいえない。現物を見ないままに解題を付したものが踏襲されたのである事、さらには別の写本が存在するかも知れない事も考えられる。

## 二 諸本の体裁の検討

### A 吉永本

△第一冊目▽の冒頭に、「凡例」・「目次」が付されている。「凡例」〔相愛国文〕第六号に翻刻〕は、東博資料館本・岡山大学本にも付されていて、記述は三本ほぼ同一であるが、東博資料館本・岡山大学本ではいずれも△第五冊目▽の最後に位置し、ともに「萬葉集凡例」との題が付けられている。

### B 神習文庫本

△第二冊目▽において「萬葉集詁巻四」として掲げる項目は、吉永本で言えば△第二冊目▽の内容にあたるが、「草木穀菜」・「鳥獸蟲魚」・「服食器財」の三項目に解説を分けている吉永本とは異り、「服食・鳥獸・蟲魚・草木・器財」の一項にまとめている。吉永本に照らして言えば、「穀菜」の項目立てが抜けていることになる。見出し語彙数は、吉永本の三項目合計五九七語に対し、神習文庫本では一項目にまとめて六二五語と、神習文庫本の方が多い。更に、神習文庫本以外の三本に「態藝事爲」・「虚詞助辭」とある項目名が、神習文庫本ではそれぞれ、「虚詞」・「事態」とある。△第三冊目▽の末尾には、題を付さないままでの〔あとがき〕的な文がある。

### C 東博資料館本

各冊に題簽を付し、五冊を△第一冊目▽から順に、「仁」・「義」・「禮」・「智」・「信」と名付けている。ところが、こ

の東博資料館本の題簽には全冊「萬葉集話」と表記している。この表記は題簽においてのみではなく、第五冊目／を除く各巻の冒頭においても同様であるが、こうした表記は他の三本には見られない。著者蘭洲には『源語話』と名付ける著書もあるところからも、『萬葉集話』が正しい書名であろう。それぞれの表紙に「中川草庵昌房著」とあることも併せ、書写した人物の賢しらであらうか。

△第一冊目／から△第五冊目／までの各冊を、それぞれ「巻之一」から「巻之五」としている。ただし、△第一冊目／に記されるべき「萬葉集話 巻之一」との表示を書き落としている。巻末に「萬葉集 凡例」があるが、ここも正しくは「萬葉集話 凡例」と記されるべきところである。

#### D 岡山大学本

△第一冊目／から△第五冊目／までの各冊を、題簽においてそれぞれ「一」から「五」とする。△第四冊目／の題簽に「萬葉集話」とあるのは、「萬」に統一すべきを書き誤ったもの。△第三冊目／末尾に付す「萬葉集 凡例」は、吉永本の「凡例」および、東博資料館本の「萬葉集 凡例」と同じ内容である。

諸本、巻名を付しているものと、無いものがあるが、神習文庫本のほかはすべて、吉永本とほぼ同様の項目名を掲げて八項目に分類している。さらに、それぞれについて、語彙の取りあげ順序も解説の仕方も酷似している。しかし、神習文庫本がカタカナを用いている事をはじめとして、その表記は、必ずしも同一ではない。収載語彙数は、神習文庫本の二五八六語が最も多い。

これらを、表示してみれば、次のようにまとめることができる。漢数字はそれぞれの丁数を、算用数字は収載語彙数を示すこととする。

<p>A 吉永本</p>	<p>△第一冊目▽  (表紙書) 萬葉集詠上  (内容) 五七  萬葉集詠二三  凡 例  目 次  天文時候  地理宮室  鬼神人倫支體  (290)(338)(157)</p> <p>△第二冊目▽  (表紙書) 萬葉集詠中  (内容) 四四  萬葉集詠四五六  草木穀菜  鳥獸蟲魚  服食器財  (273)(121)(203)</p> <p>△第三冊目▽  (表紙書) 萬葉集詠下</p>
<p>B 神習文庫本</p>	<p>△第一冊目▽  (題簽) 萬葉集詠上  (内容) 四五  萬葉集詠卷一  天文時候<sup>(マ)</sup>  萬葉集詠卷二  地理宮室  (756) (166)</p> <p>△第二冊目▽  (題簽) 萬葉集詠中  (内容) 五四  萬葉集詠卷三  鬼神・人倫・支體  (296)  萬葉集詠卷四  服食・鳥獸・蟲魚  草木・器財  (625)</p> <p>△第三冊目▽  (題簽) 萬葉集詠下  (内容) 四四</p>
<p>C 東博資料館本</p>	<p>△第一冊目▽  (題簽)  萬葉集詠<sup>中川策庵昌房著 仁</sup>  (内容) 五一  萬葉集詠 附言  天文時候  地理宮室  (747)(157)</p> <p>△第二冊目▽  (題簽)  萬葉集詠<sup>中川策庵昌房著 義</sup>  (内容) 二〇  萬葉集詠卷之二  鬼神人倫支體  (282)</p> <p>△第三冊目▽  (題簽)  萬葉集詠<sup>中川策庵昌房著 禮</sup>  (内容) 三二  萬葉集詠卷之三</p>
<p>D 岡山大学本</p>	<p>△第一冊目▽  (題簽) 萬葉集詠一  (内容) 一〇九  萬葉集詠  天文時候  地理宮室  (747)(157)</p> <p>△第二冊目▽  (題簽) 萬葉集詠二  (内容) 一二八  萬葉集詠  服食器財  草木  鳥獸蟲魚  (115)(201)(276)</p> <p>△第三冊目▽  (題簽) 萬葉集詠三  (内容) 五三  萬葉集詠  鬼神人倫支體  (290)</p>

全三冊・八卷・一六二丁 八項目・2158語	<p>(内容)</p> <p>萬葉集詠七八終</p> <p>態藝事爲</p> <p>虚詞助辭</p> <p>(322)(454)</p> <p>六一</p>
全三冊・六卷・一四三丁 八項目・2586語	<p>萬葉集詠卷五</p> <p>虚詞</p> <p>萬葉集詠卷六</p> <p>事態</p> <p>〔あとがき〕</p> <p>(438) (305)</p>
全五冊・五卷・一七四丁 八項目・2567語	<p>態藝事爲</p> <p>〈第四冊目〉</p> <p>(題簽)</p> <p>萬葉集詠中川策庵昌房著智</p> <p>(内容)</p> <p>萬葉集詠卷之四</p> <p>服食器財</p> <p>草木穀菜</p> <p>鳥獸蟲魚</p> <p>〈第五冊目〉</p> <p>(題簽)</p> <p>萬葉集詠中川策庵昌房著信</p> <p>(内容)</p> <p>萬葉集詠卷之五</p> <p>虚詞助辭</p> <p>萬葉集凡例</p> <p>(327) 二九 (456)</p>
全五冊・五卷・四二二丁 八項目・2563語	<p>〈第四冊目〉</p> <p>(題簽) 萬葉集詠四</p> <p>(内容)</p> <p>萬葉集詠</p> <p>態藝事爲</p> <p>萬葉集詠</p> <p>〈第五冊目〉</p> <p>(題簽) 萬葉集詠五</p> <p>(内容)</p> <p>萬葉集詠</p> <p>虚詞助辭</p> <p>萬葉集凡例</p> <p>(324) 六二 (453) 六九</p>

次に、諸本それぞれの項目の冒頭の部分〔始〕で示すと、項目末尾の部分〔終〕で示すを翻刻表示して、各項がどの語のどの様な解説で始まり、どの語で終っているかを確かめることとする。

天文時候

A 吉 永 本

〔始〕 以 いまち月 あかしとつゝけたり 十八夜の月なり

〔終〕 ひさかたの月

B 神習文庫本

〔始〕 ○イ部 イマチ月 ㊦アカシトツ、ケタリ、十八日ノ月也

〔終〕 ○モ部 モチクタチ 四十五日已後也 ○セ部 ○ス部

C 東博資料館本

〔始〕 以 いまち月 三あかしとつゝけたり 十八日の月なり

〔終〕 ひさかたの月 ハ

D 岡山大学本

〔始〕 伊 ゐまち月 三あかしとつゝけたり 十八日の月也

〔終〕 ひさかたの月 ハ

Bは、カタカナを用いた表記となっている(以下、各項目についても同じ)。〔始〕の見出し文字がDではワ行の「ゐ」になっているのはじめ、文字遣いに一部相違が見られるが、四本の解説はほぼ同じである。Aのみは、「十八夜の月」とある。〔終〕の「ひさかたの月」について、C・Dにはこの語の出る萬葉集の巻数を「八」で示しているが、巻数表記のないAを含めて、この語については見出し語のみで、解説はない。Bでは、「○モ部」とある直前「○ヒ部」の末



尾に「ヒサカタノ月」<sup>四</sup>と見出し語のみがあり、この項目の最後は見出し語を掲げないまま「○ス部」との表記で終わっている。

地理宮室

A 吉 永 本

(始) いなみくにはら 播磨印南也 郡をくにとも云

(終) すみよしの里 住吉ならず 只すみ心よき里といふによめり

B 神習文庫本

(始) ○イ部 イツミ川 曰蛙ナクトモ、又菅ヲヨメリ、今ノ木津川也

(終) スミノ江 四浦シマノ哥ニ墨吉水江トカキテトモニ仙讀ニ、スミノエトヨメリ、季注ハ、同所トミ

テ丹波トセリ、又童蒙抄ヲ引テ、一州を立ツヨリテ水江ヲ丹後トモスル也、ヲヨソコノ万葉ニ、墨吉トカキテモ、仙讀ハミナスミノエトヨム、浦島ノ「カツテ摂州ノスミノエトイフコト見エ子ハ、イツレニモ丹波ナル」明也、墨吉トモカキ、スミノエトモヨメルハ、カタ／＼イフカシ、ソノ上、仙讀イツレモスミノエトアリテ、一所モミツノエトナシ、

(北谷注 神習文庫本では「スミノ江」の語注の後に「ハシケヤシ、ハシキヤシ、ハシキ、ハシコヤシ」・「ヨシエヤシ、ヨシエ」・「モトナ、モトナシ」・「ウラモトナク」と題して、例歌を掲げての文章による解説がある。)

C 東博資料館本

(始) いなみくにはら 一播磨<sup>(イマ)</sup>卯南也 郡をくにとも云

(終) すみのえ 八浦島の哥に墨吉水江と書てともに仙点にすみのえとよめり季説にハ同所とみて丹波

五井蘭洲『萬葉集詁』の諸本について

とせり亦童蒙抄を引て丹後ハ元明天皇の時丹波をさきて一州を立よりて水江を丹後ともする也凡萬葉に墨吉と書ても仙点は皆すみのえと讀浦島の事かて摂州のすみのえともよめるハかた／＼いふかし其上仙点にいつれも皆すみのえと有て一所もみつのえとハなし

D 岡山大学本

(始) 以 いなひくにはら 一播磨印南也 郡を国とも云

(終) すみの江 ハ浦島の哥に墨吉水江と書てともに仙点にすみのえとよめり季説には同所と見て丹波とせり又童蒙抄を引て丹後は元明天皇の時丹後をさきて一州を立よりて水の江を丹後ともする也凡萬葉に墨吉と書ても仙点は皆すみのえと讀浦島の事かて摂州のすみの江と云事見えねハいつれにも丹波なる事明か也然るに墨吉とも書てすみのえともよめるハかた／＼いふかし其上仙点にいつれも皆すみの江と有て一所もみつのえとはなし

この項目におけるA・B・C・Dの(始)の部分については、見出し文字も、語注も一誤字と思われるものや、漢字書きか仮名書きかの違いを除いて一ほぼ同様である。ただしBの(始)は「イツミ川」から始まっていて「イナヒクニハラ」は、前から三番目に「イナヒクニハラ 曰播<sup>ハヤ</sup>ノ印南也、郡ヲ、古ハクニトイフ」とある。(終)は、A本「すみよしの里」の語注で終わるが、「すみのえ」を解注する他の三本の記述はほぼ同様である。A本には「すみの江」の見出しも、語注もない。

鬼神人倫支體

A 吉 永 本

(始) 以 いにしへのをうな 年ふりたる女也 をうなとはかりにても老嫗のこと也 をんなとは別也  
(終) すゑ人 陶器をつくるひとなり

B 神習文庫本

(始) ○イ部 イモ 日家ニ在イモトアリ、妻ヲ云、又四ニ出タルハ、実ノ妹ライヘリ、

イニシエノヲ、ナ 年老タル女也、ヲ、ナトハカリニテモ、老女ノヲ也

(終) スエ人 陶器ヲツクル人也

スミラミクサ 田民クサトイフ如シ、季注ニ、師説トテ、コレハ官軍ノヲナリト云、是也、

防人ノ哥ナレハ、ヲノレ官軍トナリテ、ココニ来リシトヨメル也、皇御軍也、軍ノ字

ニテ、士卒ノコトニナル也、戦ト云コトニ非ス、

C 東博資料館本

(始) 伊 いにしへのをうな 二年ふりたる女也 をうなとはかりにても老嫗のこと也 をんなどハ別也

(終) すゑ人 十六陶器をつくる人也

D 岡山大学本

(始) 伊 いにしへのおうな 二年ふりたる女也 おうなとはかりにても老嫗の事也 をんなどとは別也

(終) すゑ人 十六陶器をつくる人也

A・C・D三本ともに「いにしへのをうな」に始まり、「すゑ人」に終わっていて、解注もほとんど変わるところがない。Bのみは、(始)「イモ」・(終)「スミラミクサ」となっていて、三本の冒頭および末尾の語注がB本では、それぞれ前から二番目(「イモ」の次)、後から二番目(「スミラミクサ」の前)に位置している。

草木穀菜

A 吉永本

(始) 以 いつもの花 仙云いつはほむる詞 藻の花也 見安云出藻

(終) すゑつむ花 くれなるのすゑつむ花と有 紅花なり

B 神習文庫本……(北谷注 神習文庫本は、「服食、鳥獸、蟲魚、草木、器財」を一まとめにして、巻四の一卷を成している。)

(始) ○イ部 イサナ ㊦……トリ海辺トツ、ク、又アフミトモツ、ク、イサハ、イサム也、勇也、ナハ、魚也、スナハチ、勇魚トモカケリ、湖海ノ大魚ヲサシテイフ、鯨ニカキラス、季吟説、磯菜取  
リト義ヲトル所モアリト云、

(終) スタク 田<sup>七</sup>集ル也、野モサワニ鳥スタケリト有、人ニハ用ヒヌ言カ、

(北谷注 ちなみに、吉永本・東博資料館本・岡山大学本のいずれもが冒頭に注を付す「いつもの花」についての神習文庫本の注記は初めから四番目にある。解説は次のとおりである。)

イツモノ花 四仙云、イツハ、ホムル詞也、藻ノ花ナリ、見安ノ説ニハ、出藻ノ花ナリ、水中ヨリ出ル、藻ノ花ナリ、

### C 東博資料館本

(始) イ いつもの花 四仙云いつハほむる詞藻の花也見安説出藻

(終) すゑつむ花 くれなるの……紅花也

D 岡山大学本……(北谷注 岡山大学本では、この項「草木」とある。)

(始) イ いつもの花 四仙云いつハほむる詞藻の花也見安説出藻

(終) すゑつむ花 くれなるの……紅花也

A・C・D三本ともに、この項は「いつもの花」に始まり「すゑつむ花」に終わっていて、一部引用歌の省略箇所がありはするけれども、語注も同様である。さきに注記したとおり、Bには「草木穀菜」との項目がなく、「服食・鳥

獸・蟲魚・草木・器財」の一項目にまとめているので、「いつもの花」は初めから四番目に「イツモノ花 四仙云、イッハ、ホルム詞也、藻ノ花ナリ、見安ノ説ニハ、出藻ノ花ナリ、水中ヨリ出ル、藻ノ花ナリ」とあり、見安説を引用しての解説が詳しい。「すゑつむ花」の語注は後から十一番目にあり、他の三本とほぼ同様に「スエツム花 田クレナ イノ——紅花也」とある。

鳥獸蟲魚

A 吉 永 本

(始) いさな とり海邊とつゝく 又あふみとも いさは勇なり、なは魚也 海中湖中の大魚也 鯨に

かきらす 勇魚とも書り 季説に磯菜取と義をとる所有

(終) すたく 集るなり 野もさはに鳥すたけりと

すなとれる 態藝門に出たり

B 神習文庫本……(北谷注 神習文庫本巻四の語注は、「○イ部 イサナ」から始まり、「スタク」で終わっている。解説は、前掲「草木穀菜」の項に示すとおりである。)

C 東博資料館本

(始) いさな ニ……とり海邊とつゝく亦あふみともいさハ勇也なハ魚也海中湖中の大魚也鯨にかきら

ず勇魚とも書り季説に磯菜取と義をとるところありと

(終) すたく 十七集る也野もさはに鳥すたけりと

すなとれる 態藝門に出たり

D 岡山大学本

(始) いさな ニ……とり海邊とつゝく又あふみともいさは勇也なは魚也海中湖中の大魚也鯨に限らす

五井蘭洲『萬葉集詁』の諸本について

勇魚とも書り季説に磯菜取と義を取処有と

(終) すたく 集る也野もさはに鳥すたけりと

「い」の項の「いさな」の語注は、四本ほぼ等しく、なかでBの「服食・鳥獸・蟲魚・草木・器財」の部にみえるこの語の注記は他の三本に比してやや詳しい。(終)は、A・Dには「すなとれる 態藝門に出たり」と二本同様の記述があつて、注記を他の部門に委ねているが、「すたく」の語注はB本も含めて、四本ほとんど同じである。

服食器財

A 吉 永 本

(始) いは舟 さくめかいは舟とつゝく

(終) すりふくろ 燧を入れるゝ袋也 旅の用意のもの也 季云 すき袋也と 透たる袋也と

B 神習文庫本

(始) (北谷注 神習文庫本巻四の注記は、「○イ部 イサナ」から始まる。「いは舟」についての注記は初めから二番目にある。解説は次のとおりである。)

イハ舟 ㊦サクメカ……トアリ、

(終) (北谷注 神習文庫本巻四の注記は、「スタク」で終わっている。「すりふくろ」についての注記は終わってから二番目にある。解説は次のとおりである。)

スリ袋 ㊦燧ライル、袋也、旅ノ用意ノ物也、季注ハ、スキ袋也、透タル袋也ト、

C 東博資料館本

(始) 半 いは舟 三探女か……と有

(終) すりふくろ 十八燧を入れる袋也旅の用意の物也季抄ハすき袋也と透たる袋也と

D 岡山大学本

(始) 伊 いは舟 三探女……と有

(終) すりふくろ 十八燵に入る袋也旅の用意の物也季抄ハすき袋とも透たる袋也と

項目の立て方が相違するBをも含めて、(始)「いは舟」・(終)「すりふくろ」の語注は、四本ほとんど変わりがない。Cの見出し文字「キ」は、C本の中でこの箇所のみ。「服食器財」とあるこの項のみ、「い」の見出し文字が四本全部相違している。

態藝事爲

A 吉 永 本

(始) 以 いはひふし いは発語鹿は前足を折てふすものなり うや／＼しきをいふことは 鶺鴒も草陰をはひまはる故にうつらなすいはひもとをりといふ 又いはひふすらめと云を契説に鹿を射ふせる也いはひもとをりとは鶺鴒を射て首をもとらし置といへり 前後矛盾せり まへの説をよしとすへし

(終) すえのたねから 季云末を先と見て先世の宿業ゆへといへりいかゝあらん 見安云こゝろのたねからといへるもいふかし

B 神習文庫本…… (北谷注 神習文庫本では、この項「事態」とある。)

(始) イ部 イハヒフシ 曰イハ発語、ハヒハ、手足ヲ地ニツケテハフナリ、フスハ俯也、是ハ瘰<sup>シカ</sup>ニタトヘテ云フ、シカハ、前足ヲ、リテフス物ナリ、ヨリテウヤマウ白ヲタトヘテ云フ也、鶺鴒モ草陰ヲハヒマハル故ニ、ウツラナスイハヒモトラリト云フ、スカナク 田中静ナル心モナク也、心ノヲチツカヌナリ、

(終)

C 東博資料館本

(始) いはひふし 二ハ発語鹿ハ前足を折てふすもの也や／＼しきをいふことは鶉も草かけをはひま

はる故にうつらなすいはひもとをりといふ亦三いはひふすらめと云を契沖説に鹿を射ふせる  
也いはひもとをりとハうつらを射て首をもとらし置くといへり前後矛盾せり前説をよしとす  
へし

(終) すゑのたねから 十五季説末を先とみて先世の宿業有といへりいか、あらん見安の説にこゝろのた

ねからといへるもいふかし

D 岡山大学本

(始) いはひふし 二ハ発語鹿ハ前足を折てふすもの也や／＼しきをいふ詞鶉も草かけをはいまはる

故にうつらなすいはひもとほりと云亦 三いはひふすらめと云を契中説に鹿を射ふせる也い  
はひもとほりとハうつらを射て首をもとらし置くといへり前後矛盾せり前説をよしとすへし  
(終) すゑのたねから 十五季説末を先とみて先世の宿業有といへりいか、あらん見安の説にこゝろのた  
ねからといへるもいふかし

四本ともに「いはひふし」に始まつていて、Bを除く三本は、語注も同じである。(終)の「すゑのたねから」の語  
注もA・C・Dは同様であるが、B本の(終)は「スカナク」であつて「スエノタネカラ」ではない。Bの、この項  
の終わりから四番目に「スエノタ子カラ 田国季説、末ヲ先トミテ、先世ノ宿業ユヘト解リ、イカ、アラン、見安ノ説、  
コ、ロノタ子カラトイヘルモ、イフカシ」と、他の三本同様の解を記している。

虚詞助辭

A 吉 永 本



(始) いさ 縦の字を用ひたり 縦然の心なれはたとひと同し 契云是をいさと讀は誤也 よしと讀へ

しといへり 必しもしからず いさといひてよしの心になる也 尤此いさはさの字にこるへ  
からず 又不知のこゝろにあらす さをにこれは誘ふ也 不知の心あるは如何也 かとさと  
通すれはなり

(終) すけき 玉簾のこすのすけきと有 仙云すけきはすき也 静なる心と有 季云顯昭俊頼哥にき

けきとよみてしけき心とす 愚案すき也 けは助字也 うきをうけくといふ類なり 小簾の  
すきまより来れといふなり

B 神習文庫本……(北谷注 神習文庫本ではこの項、「虚詞」とある。)

(始) イ部 イサ 〇縦ノ字ヲ用タリ、縦然ノ心、タトイト云ニ同シ、契沖云、是ヲイサトヨムハ誤也、ヨシ

ト讀ヘシト有、必シモシカラス、イサト云テ、ヨシノ心ニナルナリ、モトヨリコノイサノサ  
ハ、ニコリ讀ヘカラス、ニコリヨメハ、誘ノ義トナル、又不知ノ心ニ非ス、不知ノ義ナレハ、  
イカント云心也、

(終) スケキ 田玉タレノコスノ……トアリ、諸説多シ、愚案、スケキハ、スキ也、ケハ助字ナリ、

ウキラ、ウケクト云如シ、小簾ノスキマ也、

C 東博資料館本

(始) イ いさ 二縦の字を用ひたり縦然の心なれはたとひと同し契説ハ是をいさと讀ハ誤り也よしと讀へし

といへり必しもしからずいさといひてよしの心になる也尤此いさハさの字にこるへからず亦  
不知のこゝろにあらすさをにこれハ誘ふ也不知の心あるハ如何也かとさと通すれハ也

(終) すけき 十二玉簾のこすの……と有仙説にすけきハすき也静なる心とあり季抄ハ顯昭俊頼哥を引

五井蘭洲『萬葉集詁』の諸本について

ききげきとよみてしけきこゝろとす愚案ニすけきハすき也<sup>け</sup>ハ助字うきをうけくといふ類也  
小簾のすきまより来れとなり

すたく 鳥獸部に出たり

D 岡山大学本

(始) 以 いさ 二縦の字を用いたり縦然の心なればたとひと同じ契説ハ是をいさと讀ハ誤也よしと讀へしと

いへり必しもしからすいさといひてよしの心になる也尤此いさはさの字にこるへからす又不  
知の心にあらすきを濁れハ誘ふ也不知の心有ハ如何也かとさと通すれハ也

(終) すけき 十一玉簾のこすの……と有仙説にすけきはすき也静なる心と有季抄ハ顯昭俊頼哥を引て

きげきとよみてしけき心とす愚案は……ハすき也けは助字うきをうけくといふ類也小簾のす  
きまより来れと也

四本ともに「いさ」に始まり、「すけき」の語注に終わっているが、Cのみは、更に「すたく」の見出しがあり、語  
注を他部門にゆだねている。注の仕方は、A・C・Dほとんど相違ないが、Bには、他本の記述を縮小したものと  
思われる省略がある。

語注を見るかぎり、C本とD本とは極めて近く、B本のみはカタカナ表記であるが、四本の解注に大きな相異はな  
い。『國書総目録』にいう宝暦二(一七五二)年、寛政九(一七九七)年の年記はB本の「あとがき」、C本の「附言」  
にみえるが、C本を除く三本についての書写年次等を詳細に知ることはいかない。

三 「あとがき」と、「萬葉集話 附言」——翻刻——

次に翻刻するものは、神習文庫本(第三冊目)の末尾に付されている「あとがき」と、東博資料館本(第五冊目)

の末尾に付されている「萬葉集話 附言」である。ただし、神習文庫本の末尾の文には、題は付されていない。便宜上「あとがき」と名付けて、翻刻したものである。改行を／で表示し、判読しがたい箇所は□で示すこととした。

ア 神習文庫本 「あとがき」

三位の君哥合の判の詞に萬葉に見えたりといひつれば／閉口することさるへきにあらすとの玉ひし八人ことにかの／集をむねとせるゆゑさるいましめもありけらし実／かの集を見るに天地のうちにあるとある事大方もなし／すじもなくいひ出せるを唯此さまにとのみまなひも／て行かははて／ハいとめさましふされはみてや／いにしへの風も吹やみぬへくやならんかししかあらせし／とて代々の先達の姿をも正し詞をもえりみよるづ／の掟ともしてハへたまふたるにこそされは又其つなにと／ハれていと恥せう心のまゝに得うこくへうもあらすなりに／たり此頃蘭州五井の君しかなりもてきぬるはいと興／なしとおほしてよますハたゝよまでありなん讀と／ならは何事をかハ讀さんふるき言葉をつゝけんに／何てうなつくへきさハ詞たらはは筆ゆかすとかの集の／詞のよかるあしかるともにかきつけてをの／その／品をわかち詞ことに古き解のさりぬへきをあけはた／みつから説をそへて都て六の巻となし題して萬葉／集話といふ景範是を写し得てひそかにそのむね／をしるす事しかなり

寶曆壬申の夏立る月はつ／かあまり

蘭洲先生撰

子常補

寶曆壬申季夏子常写

(了)

イ 東博資料館本

五井蘭洲『萬葉集話』の諸本について

五井蘭洲『萬葉集詁』の諸本について

萬葉集話 附言

浪花後学中川策庵昌房識

蘭州五井先生ハ浪花の鴻儒にしてことに篤実徳行の／聞え高しかつ斯餘本邦の書を閲していとま有折々／記し置れし抄物そくはくなる夫か中にわきて伊勢／物語を内外の二編にわかし注釈をくわへ置れしに一家／識鑒を開き  
在五の君年来の汚名をそゝき初て仁愛／忠孝にして才覚優長の人物たる事を知れり古今數／十家の注者のいまた  
いはさる處なるを遙の後世に出て／中將の人となりをよくわきまへ知りたる人といふへし／其外萬葉・古今集の  
抄にも諸説の誤りを正し／たらさるを補ひ粗発明をくはへて全き注釈そなは／れり凡古来和哥を注せるみれば抄  
書／其數はかるへからず近来に至り北村季吟老人万葉／集以下勅撰の集及び伊勢・源氏の物語等に至る／まで悉  
集成して注せすといふ事なし然りとといへとも凡／古抄の類をつゝりて一二を書入せるのみ爰に元祿の／年間浪花  
に宗家の沙門契沖といへるあり其頃本／邦の學に富か聞え有て水戸黃門君の命を受て／萬葉集の注を纂述有内外  
の典籍をかうかへ和語／をとくに悉く古書の誤を正し秘受口史などの妄／説を用ひす誠に數百歳の後に成て哥林  
復古の学を起せりと謂つへしもとより堂上貴介公子の御家には／傳來の流てあれば今更とり用ひ玉はさる説も有  
へ／けれど又世に其風を好み其跡を慕ふ學者も近来／おほかんめり今蘭州先生も古来注家の是なるを元／とし茂  
きを刈もれたるを補ひかつ今案をくわえて／此話なれり古家の注釈を見んには代匠記しからん／其體和漢の書に  
正して義理分明なれば也今又古体の／和哥つくらんと思ふ時際限なき言葉を探り求んに／ものうしかゝる時に望  
んで便せんには此集話にすくへ／からす其言彼事やすらかに説きさとしやすきを旨として／抄出せられたり我こ  
とき拙きものゝためには重宝のたまもの／なりけらし先生爰に心を用ひ置□して賞してその／あらましを記す又  
いふ此書の國字後世いへるかな遣ひ／にはあはさるへしあやしむへからす此事ハ別に論あり／先生漢文の著述あ  
また有此頃浪花学校より梓に／えりて世間に流布す志あらん人は得て其高論に知り／給ふへし和書に於ては其家  
の掌にあらされとかや／おはせし日も漫に書写をゆるされさりしか予は親みの／浅からすして幸に書写しとめぬ

蘭州先生東武へ赴しゝ時、隅田川の邊りなる在五の詞にて

薄倖名空在 遺文血色長 可憐風雪夜 誰為斷愁腸

先生新題百首の題を出して和哥をよみし時 長安春望

まうのほる大内山の春なれやにしきをはなの雲のうへ人

老妓

もとゆひの乱れて雪とふるされし昔を今にしのもちすり

春宮怨

かせをいたみ御階の上に誘ふやとめてぬさくらのうらやまれぬる

春閨怨

うくひすの音羽の山の音にたに人のたよりをまちつゝもかなし

楠中將

たのむへき面の枝やたちかへり世をすへらきの夢にいりふし

孔雀

山とりにあらぬはつをのたまさに南海を幾重こえ来し

東山長嘯子

生る日の宿のけふりは先消ぬつひの薪の身はのこれとも

うめが枝も春や昔と匂ふ夜にかたみくもれるありあけの月

都人夢に入なゝはつ尾花手まくらかれてあきかせそふく

下河辺長流子

五井蘭洲『萬葉集詁』の諸本について

敷しまの大和なからにはたはりのから錦とも見ゆることの葉  
橋ならぬ人のことの葉朽もせし長柄の川のなく流れて

契沖子 今の哥を

ちはや振神代の八雲すゑの世にうすらきはてゝ色ものこらす

今の神道を

をひ初し其夢かいの根をもみぬ神代のことや末にたかはん

簑かさあした

露の身のなにかさまく物は思ふあしたのほとを千世と頼みて

古風を慕つる人らの集中にて能よみ玉へると愚案に／思へるをひとつたつ書出し侍りぬ尚いくらも有ぬへし

寛政九といふとしの

冬にいたるあした

高津屋

中川昌房

(了)

あ　と　が　き

近世大阪の碩学五井蘭洲（一六九七—一七六二）の著になる『萬葉集詁』は、萬葉集中の難解な語句に注解を施したものであり、萬葉集研究において注目すべき著書である。今回は、前述四本の体裁の一部を検討してみた。吉永本を考察したものに拙稿「『萬葉集詁』について—その方法論的考察—」（『千里山文学論集』第29号・昭和58年12月）がある。四本の内容の検討を引き続いての課題としたい。

〔付記〕

翻刻・索引作成・本稿について、資料の閲覧に便宜を図ってくださった方々、ご助言をいただいた八木毅氏・廣岡義隆氏、山本和明氏をはじめ本学国文学研究室の諸氏に、御礼申し上げます。